

世界批評大系 4

世界批評大系 4

小説と現実

筑摩書房

世界批評大系 小説と現実

一九七五年八月三十日初版第一刷発行

198-204-604

発行者 井上達三 発行所 株式会社筑摩書房

三 東京都千代田区神田小川町二八 電話 二九一 一七六五一 振替東京六〇四 一二三

井村印刷／明和印刷 和田製本

第四卷目次

オノレ・ド・バルザック／スタンタール 富永明夫訳

『パルムの僧院』をめぐって

*

B・Γ・ヘリンスキイ 除村吉太郎訳

一八四七年のロシア文学観

ニコライ・チェルヌイシェフスキイ 北垣信行訳

『幼年時代および少年時代』『J・H・トルストイの軍隊短篇小説集』

ニコライ・ドブロリユーボフ 石山正三・磯谷孝訳

打ちのめされた人々

ドミトリイ・ヒーサレフ 飯田規和訳

バザーロフ 抄

*

ポール・フルジェ 石井晴一訳

バルザックと『従兄ボンス』

レスリー・ステイウン 中野好之訳

フィールディングの小説

ゴットフリート・ケラー 増田義男訳

イエレミアス・ゴットヘルフ論

アーダルベルト・シュティフター 松浦憲作訳

『石やまごま』序文

テーオドル・フォンターネ 立川洋三訳
ウォルター・スコット

ジョージ・ムーア 井出弘之訳
ジョージ・エリオット

G・K・チェスタトン 小池滋訳
ヴィクトリア朝の小説家

コンスタンチン・レオンチエフ 千種堅訳
分析、スタイル、雰囲気

W・D・ハウエルズ 渡辺利雄訳
わがマーク・トウェイン

トーマス・マン 立川洋三訳
老フォンターネ

*

E・M・ド・ヴォギユエ 川端香男里訳

『ロシア小説』序文

ワシリイ・ローザノフ 新谷敏三郎訳

ゴーゴリについて一言

エミール・ゾラ 小林正訳

『テレーズ・ラカン』再版の序

ギ・ド・モーパッサン 宮原信訳

小説について

366

361

352

324

305

288

262

239

224

209

J・K・ユイスマンス 松室三郎訳

『さかしまに』序文

レフ・トルストイ 木村彰一訳

モーパッサン論

H・L・メンケン 野崎孝訳

シオドー・ドライサー

*

ヘンリー・ジェイムズ 行方昭夫訳

バルザックの教訓

ヘンリー・ジェイムズ 川西進訳

『使者たち』序文

*

解説 篠田一士

訳文中の割註のうち（ ）は原註、〔 〕は訳註を示す。

オノレ・ド・バルザック／スタンダール 富永明夫訳

『パルムの僧院』をめぐって

バルザック

ペール氏 (フレデリック・スタンダール) 論

今日、文学は明らかに三つの様相を呈している。そして、この三重性 triplicité——これは三位一体 trinité という語を嫌うクーザン氏〔哲学者。当時文相。一七九二—一八六七〕の造語であるが——これは類魔の徴候などではさらさらなく、多くの才能が文壇にひしめいていることから、いたって自然に導かれる結果であるように思われる。以上のことは十九世紀に捧げらるべき讃辭にはかならない。程度の差はあれ一個人ないし一体系の専制に易々として従っていた十七・十八世紀とは異なり、十九世紀は、唯一かつ同一の形式を提供するだけで事足りとはしないのである。

この三つの形式、様相、ないし体系（これをどう呼ぶのも読者の自由である）は、そもそも自然のうちに根ざすものであり、また、

教育の普及とともに〈人文芸〉の鑑賞者の数が増大し、読書の習慣が未曾有の発展をとげた時代にあつて、当然湧き起ってくるはずの、世間全般のさまざまな関心に応えるものでもある。

あらゆる世代、あらゆる国民を通じて、悲歌的、瞑想的、観照的精神の持主は必ず存在するものであり、彼らは壮大なイメーシ、自然の広大な景観にとりわけ心を惹かれ、それらを自分のうちに攝取する。ここから生まれるのが、あえて私がヘイメーシの文学〈Littérature des Images と名づける一大流派であり、これに属するものとして、抒情詩、叙事詩、および外界の事物に対するこのような接し方に端を発するすべての文学がある。

一方これに対して、迅速さ、運動、簡潔、衝撃、行動、ドラマを愛する活動的な魂の一群があり、これは論議を避け、夢想にふけること少なく、もっぱら結果を好む。ここから生まれるのは前者とまったく異なる一文学体系であり、これに由来するものを、私は前者との対比において〈觀念の文学〉、Littérature des Idées と呼びたい。

最後に、すべてを兼ね備えたある種のすぐれた人々、両面的な知性の持主があり、彼らはすべてを包摂し、抒情性と行動、ドラマと頌

歌を同時に志向する。完璧さとは、事物の総合的展望を要求すると信じているからである。この流派は「文学的折衷主義」(Ecclectisme littéraire)とでも呼んでおくほかないと思うが、その求めるところは、世界をあるがままの姿において表現すること、すなわち、イメージとともに観念を、イメージのうちに観念を、あるいは観念のうちにイメージを、運動とならんで夢想を提示することである。ウォルター・スコットは、この種の折衷的性格を完全に満たした人であった。

どの流派が優位を占めるか、私には見当もつかない。前述の自然にもとづく分類にしても、ここから強引な結論を引き出されるようでは困るのである。したがって私は、「イメージ派」の某々詩人が観念を欠くとか、「観念派」の某々が美しいイメージを生み出す才能をもたぬとかいうつもりはない。先に述べた三つの定義は、単に各詩人の作品全体が与える一般的印象、作家がその思想を投げ入れる鑄型、彼の精神の傾斜といったものに適用されるのみである。ただ、およそすべてのイメージは、一つの観念、もつと正確にいうならさまたまの観念の集積である一つの感情に対応するものであるのに反し、ある観念は必ずしも一つのイメージに到達するとはかぎらない。観念はそれを敷衍し発展させる作業を要求するが、これは誰にもできるということではない。この故にこそイメージは本質的に大衆的なものであり、また容易に理解され得るのだ。ヴィクトル・ユゴー氏の『ノートルダム・ド・パリ』が『マノン・レスコー』と同時に世に問われたと想定してみられるがいい。おそらく『ノートルダム』は『マノン』よりはるかに早く大衆の心を捉えだるうし、民衆の声、Vox Populiの前に跪拝する人々の目には、これを凌ぐ

ものと映ることだろう。

しかしながら、ある作品がどのようなジャンルに属するものによ、それが「人類の記憶」にとどまるためには、「理念」(イデア)の諸法則、および「形式」の諸法則に従うほかはない。文学における「イメージ」および「観念」は、絵画において「デッサン」および「色彩」と呼ばれるものにほぼ照応する。ルーベンスとラファエロはともに偉大な画家だ。が、ラファエロが色彩家でないなどと思う者があるとするれば、それは奇妙な思い違いというべきだろう。また、ルーベンスに素描家の名を拒む者がもし居るなら、この高名なフランドルの画家が、いわばデッサンへの頭としてジェノヴァのイエズス会派教会に納めた画幅の前に跪くがよからう。

ペール氏は、むしろスタンダールという筆名によって知られているが、私の見るところ「観念の文学」派の最大の巨匠の一人である。この一派に属する人々としては、アルフレッド・ド・ミュッセ、メリメ、レオン・ゴズラン【小説家・劇作家。バルザック、ペランジュ、ジャンソン作家。】、ドラヴィーニュ【小説家。一八〇三—一八六六】、ギユスターヴ・ブランシュ【批評家。一八〇—一八五七】、ジラルダン夫人【詩人・小説家・劇作家。一八〇四—一八五五】、アルフォンス・カール【ジャーナリスト・小説家。】、シャルル・ノディエ【小説家。幻想的作風で知られる。一七八〇—一八四四】の諸氏の名があげられよう。アンリ・モニエ【劇作家・俳優としてよりもむしろカリカチュア】も、その「格言劇」【格言・諷刺下敷】の真実さによってこの一派のうちに入る。彼の格言劇はしばしば中心的な観念を欠くことがあるが、にもかかわらず、この「流派」の特質の一つである、あの自然さ的確きわまる観察とにみちている。この「流派」はすでに数々のすぐれた作品をわれわれに提供してくれているが、その本領とするところは、事実の豊富さ、イメージ

ジ派の文学は、いまだ搖籃期にあるとはいへ、すでに異論の余地ない天才を何人かその陣営に数えている。しかしながら、他方「観念」派の陣営にどれほど数多くの天才がひしめいているかを考えるとき、私は美しいフランス語を擁するわが文壇が、衰退よりは隆盛に向っていることを信ぜざるを得ない。戦いがすんでみれば、ロマン派の連中も別に新しい技法を発明したわけではない、ということもできよう。たとえば演劇において動きの欠如を嘆じていた連中も、実は長台辞や独白を大幅に援用していたわけだし、要するにわれわれはボーマルシェ流の潑刺として速度感にあふれたやりとりを耳にしたこともなければ、常に理性と観念から生れるはずのモリエール流の滑稽の再現を見る機会にも恵まれなかったのである。「滑稽」は「冥想」および「イメージ」の仇敵である。ユゴー氏はこの戦いにおいて大勝利を収めた。しかし事情に通じた人々は、帝政時代にシャトーブリアン氏に対して仕掛けられた戦いのことを覚えてゐる。あの戦いは激烈さにおいてまったく同程度だったが、もっと早く片がついた。なぜかといへば、当時シャトーブリアン氏は孤立無援であり、ユゴー氏のように雲霞のごとき手兵 *stipulate catheys* をもたなかったし、また新聞間の対立という事情もなければ、知名度からいっても世間の評価からいっても格が上の英独の天才たちが「ロマン派」に与えたような援護射撃も期待できなかったのである。

第三の流派は前述の両流派のいずれとも似通う要素をもつが、大衆を熱狂させるという点になると前二者ほどの見込みはない。大衆は妥協案 *mezzo termine* や合成物があまり好きでないし、また折衷主義というものの中に、それが彼らの熱狂を鎮めるという意味で、熱狂に対する敵対的な方策を見るからである。フランスは何ご

とによらず戦争好きだ。平和時でも、フランスはなお戦いをやめな

い。が、それにしても、ウォルター・スコット、スタール夫人、クーパー（バルザックの愛読したアメリカの小説家。一七八九—一八五二）、ジョルジュ・サンドらは、私にとつて少なからぬ天才をもつ作家と思われる。私自身はといえば、以下に述べる理由により「文学的折衷主義」の旗のもとに馳せ参ずるつもりだ。すなわち、十七・十八世紀の嚴格一方の文学的手法で現代社会が描けるとはとても思えないからである。劇的要素、イメージ、絵画的描写、細部の記述、会話などの導入は、現代文学にとつて不可欠と思われる。率直にいうなら、「ジル・プラス」は形式という観点からするとやりきれぬ代物だ。事件および観念のの重畳ぶりには、何とも言えぬ不毛感がつきまとう。「観念」は、それが「人物」にまでなったときこそ、いっそうよく理解されるはずではないか。プラトンは彼の心理的モラルを対話化したのだった。

私見によれば、『バルムの僧院』は現代における、またこれまでに現われた観念の文学の傑作である。ペール氏はこの作品中で他の二つの流派に対し多少の譲歩をしているが、その譲歩は分別ある人にとって容認し得るものだし、また両陣営にとつても意に叶うものである。

その重要性を認めながらも、私がこの本について語るのをこま

で引き延ばしてきたのは、私にとつて一種の公平さを獲得するのが困難だったためとお考えいただきたい。今でも、はたしてその公平さを保ち得ているかどうか自信がない。それほど——三度目にゆっくりと丹念に読みかえしてみてもなお——これは超凡の作と私には思えるのだ。

私の称讃がどれほどの嘲笑を買うか、それは百も承知である。ひ

どくのぼせたものだ、と人々は口々に非難するにちがいない。が実情は、ふつうならもうとくに醒めているはずのころなのに、依然として私は感激を保ちつづけている、というだけのことなのだ。あるいは人は言うだろう——想像力に富む人士は、凡人どもが傲慢かつ皮肉をこめた態度でさっぱり理解できぬと主張する作品に対して好意を抱くが、惚れこむのも早いかわり忘れるのも早いものだ、と。単純な人々、あるいは才気ある人物でも、尊大な視線で事物の表面をかすめるだけという人々はあるだろう——私は逆説を弄し、つまらぬものに価値を認めては喜んで、あるいはサント・ブーヴ氏と同様、無名のお気に入り作家の一群を抱えこんでいる、というふうに。が、私としては、真理を前にして妥協はできない。ただそれだけの話である。

ベール氏は一章ごとに崇高の輝く書物をものされた。氏は、ふつう人が壮大な主題を見出すこと稀な年齢にあつて、しかも才気あふれる幾多の書物を書いたその後で、真に高級な読者以外にはその真価を窺い得ないような作品を生んだのである。約言すれば、氏は『君主論』の現代版を書いた。あのマキアヴェッリがイタリアを追放され、十九世紀に生きていたら書いたような小説を書いたのである。

したがって、ベール氏が当然得て然るべき名声への最大の障害は、『バルムの僧院』を味読し得るだけの能力を備えた読者となると、外交官、大臣、人間観察家、社交界の大立者、第一流の芸術家など、要するにヨーロッパの頭脳を形づくる千人か千五百人はどの人々の間にしかこれを見出し得ないという事情にある。してみれば、この驚くべき書物が世に出てすでに十カ月になるというのに、ジャーナ

リストのうちのただの一人も、これを読み、理解し、論じた者がなく、またその刊行を報じ、梗概を述べ、讃辭を送った者もなく、単に言及した者すらなかったという事実は、別に意外とするにあたらない。私はこの方面に多少明るいつもりだが、最近この作品を三度目に読みかえてみて、やはり前にもましてみごとな作だと思った。のみならず、何か善行をなそうとするとき誰も感ずるあの一種の幸福感が心のうちにひろがるのを感じたのである。

絶大な才能をもちながら、その天才も限られた智的特権者に理解されるにすぎず、またその思想の超絶性のゆえに大衆的人氣を得られない一作家に対し、正当な評価を与えようとする試みこそ、一つの善行でなくて何であらうか。一夜にして得られ、また移ろいやすいそういう大衆的人氣は、俗衆におもねる者が追い求め、偉大な魂の軽蔑するところだ。もし凡庸な人々が、卓越した人々を理解することによって自らもまた彼らの域にまで到達するチャンスが得られると知っていさえすれば、『バルムの僧院』は『クラリッサ・ハローウ』(チャンドセンの書簡体小説)が刊行当時に得たのと同じくらい多くの読者を獲得してよいはずなのである。

内心に照らして恥じるところのない賞讃には、筆舌に尽しがたい甘美な味わいがある。それゆえ、以下に私の申し述べるところは、すべて高貴にして純粋な心をもつ人々を目あてに語りかける言葉なのだ。そうした人々は、声高に語られる悲観的意見にもかかわらず、どんな国にも必ず居る。いわば人知れぬ星団(本来は牡牛座プロレダス星の小集団)として、『芸術』を信奉する幾多の精神的家族の間に蔽として存在しているのである。へ人類は多くの世代を通じてこの地上に、(か)のスウェーデンの偉大な預言者スウェーデンボリーの愛

用する表現を借りるなら)、多くの魂を運ねたその星座、その天空、その天使らをもちつづけてきたのではなかったか。そして、それら選ばれた人々のためにこそ、真の芸術家たちは刻苦勉勵するのであり、またその人々の審判こそ、芸術家たちに、経済的困窮、成り上り者の無礼、時の政府の冷遇を耐え忍ばせるところのものなのである。

以下に記すところは、悪意ある人たちならこれを冗長と呼ぶだろうが、読者は大目に見てくださるものと信したい。まず第一に——これには確信があるのだが——これほど好奇心をそそり、しかも興味深い作品の要約なら、相手がどんなに気むずかしい読者でも、これに代つて未発表の「中篇小説」などを掲載するより、はるかに多くの楽しみを提供することになるだろう。第二に、私以外のどの批評家も、この作品に然るべき解説を行なおうとすれば、以下の論文と同じくらしい長さのものを少なくとも三つは書かねばなるまい。なにぶんこの作品は、一ページの中に優に一冊の本を含む場合が多あり、また多少とも北イタリアの事情に通じている人でないと説明がむずかしい本だからである。最後に一言。以下私はベール氏の助けを借りつつ、せいぜい読者の参考に資するよう努め、最後まで楽しく読んでいただこうと思っているので、意のあるところお汲みとりいただきたい。

ヴァルセルラ・デル・ドンゴ侯爵の妹、アンジェリーナは略してジーナの名で呼ばれているが、最初に現われる彼女の性格、すなわち娘時代の性格は、『フォブラス』のリニョル夫人(『フォブラス』はルヴレの小説「七八七—九〇年刊。リニョル夫人は気まぐれで情熱的な女の典型」)のそれに似ているといえる——もちろん、イタリアの女がフランス女に似ることがあり得るとすれば

の話だが。金持でミラノの出の某老貴族のもとに嫁がせようという兄の意向を裏切つて、彼女は貧乏で一文なしのピエトラネーラ伯爵とミラノで結婚してしまふ。

伯爵夫妻は親フランス派で、ウージェーヌ公〔ナポレオンの皇后ジ・イタリア王国副王として統治〕の宮廷の花形だった。物語の始まるのはイタリア王国〔ナポレオンにより創設。一八〇五—一八一四年〕の時代である。

親オーストリア派のミラノ人で、そのスパイ役を勤めているデル・ドンゴ侯爵は、皇帝ナポレオンの失脚を十四年間待ちつづけている。したがって、ジーナ・ピエトラネーラの兄であるこの侯爵は、ミラノに住むことを潔しとせず、ユーモ湖のほとりグリアンタの城館に居を構えている。この土地で、彼はオーストリアへの愛とよき思想信条を吹きこみながら長男を育てた。ところが侯爵にはファブリスという次男があり、ピエトラネーラ夫人はこの子に夢中になっていた。ファブリスは次男坊であり、したがって彼女と同じように、この子も一文たりと財産を分けてもらえまい。相続権を奪われた者に心美しい人々が寄せる、あのやさしい思いやりを知らぬ者があろうか! そこで彼女は、何とかファブリスを一本立ちできる人物にしてやりたいと思う。それに、幸いファブリスは可愛らしい子供だった。彼女は少年をミラノの学校〔原作にはイエズス会派の学院とある。〕へ入れてもらうように計らい、時おり副王の宮廷へお目見得をさせた。

ナポレオンの最初の失脚が来た。皇帝がエルバ島にいたころ、オーストリア軍に奪回されたミラノでは反動的風潮が生まれ、ピエトラネーラ伯爵の面前でイタリア軍を侮辱する言葉が吐かれるという事件が起つた。伯爵がこれを受けて立つたことがその死の原因となる。つまり決闘で殺されたのである。

伯爵夫人に恋していた男の一人が夫の死に対して復讐することと拒絶すると、ジーナは彼を辱しめてこれに報いた。すなわち、アルプスのかなたでは立派なことだが、パリでは愚の骨頂とされかねない、あの復讐法の一つである。その復讐とはこういうものだった。遠くから空しく六年間も自分に恋いこがれているこの男を、彼女は内心、*le petto* 軽蔑していたが、彼女はこの哀れな男にしきりと好意を示し、相手の期待が絶頂にのぼりつめたころを見はからって、次のような手紙を書いた。

一度ぐらいいは、気のきいた殿方らしくお振舞いになったらいかが。今後は、一度もお近づき願ったことがないものとお思いくださいませ。

いささか軽蔑の心をこめて

ジーナ・ピエトラネーラ

かしこ

その上、二十万フランもの年取のあるこの男をさらに絶望させるために、彼女は *ginginer* しはじめる……(*ginginer* というのはミラノ方言の動詞の一つで、恋人同士の間で、話を交わすところまで行く前に、遠まわしに行なわれる行為の一切をさす。この動詞から名詞の形が導かれ、「*gingino* である」というふうに言う。つまり、恋の最初の段階である)。さて、彼女はしばらくの間ある下らない男と *ginginer* したすえ、これを捨てて。その後彼女は僅か千五百フランの年金をたよりに、とある四階に居を移して引きこもるが、当時のミラノ社交界のお歴々はみな争ってここを訪れ、彼女の美しさを讃えた。

兄たる侯爵は、コモ湖に臨む父祖代々の館へ帰ってくるようにと、彼女に頼んだ。彼女はこの土地に帰ってくるが、それは可愛い甥のファブリスに再会しその保護者となるためであり、兄嫁を慰めるためであり、またコモ湖の崇高な風景に囲まれながら自分の将来について思いめぐらすためでもあった。この湖のほとりこそ、彼女にとっても、息子同様になっている甥にとっても生まれ故郷だった。彼女には子供がなかったのである。ナポレオンを崇拜していたファブリスは、皇帝のジュアン湾への上陸を知ると、叔父ピエトラネーラ伯爵の主君に仕えに行きたいと言い出す。彼の母親は、五十万フランの年取をもつ侯爵の妻でありながら、自由になる金は一スーもなかったし、ジーナ叔母さんもまったくの文なしだったから、二人は自分たちのダイヤモンドを彼にやっった。ファブリスは、二人にとって英雄だったのである。

熱狂にかられた義勇兵は、スイスを通過し、パリに着き、ワッテルローの会戦に参加する。やがてイタリアへ帰ると、全ヨーロッパの安全をおびやかしたあの一八一五年の陰謀に加担したという理由で、父からは呪われ、またオーストリア官憲のブラックリストに載る身となる。彼にとって、ミラノに入ることはシェビールベルク【モラヴィア地方の要塞】「【莫大の軍犯の年歌】」行きを意味しかねない。以来、英雄的行動のゆえに迫害される不幸なファブリス、この崇高な少年は、ジーナにとってすべてとなった。

伯爵夫人はミラノへ戻り、ブーブナ【オーストリアの元帥。一八一八年以降ロンバルディア総督】や、そのほか当時オーストリアがミラノに送りこんでいた才人たちに頼みこんで、ファブリスを迫害しないという約束をとりつけた。彼女は、非常な敏腕家の司教会員某の忠告に従って、ファブリスをノヴ

アーラに隠れ住ませていたのである。こうしたさまざまな事件の交錯する中で、金は一文も動いていない。しかしジーナは絶世の美女だった。彼女はあのロンバルディア風の美貌（*bellina, elegante*）眼を射るばかりの美）の典型だったが、それがどんなものかは、読者がミラノへ行き、スカラ座へ行き、並み居るロンバルディアの美女たちをその眼で見ないかぎり、とても見当もつくまい。こうした波瀾にみちた生活を訪れるさまざまな事件は、彼女のうちに最もみごとなイタリアの性格を育てた。彼女は才智をもち、明敏さをもち、イタリア風の優雅な物腰と、魅力にあふれた会話の才を備え、しかも驚くべき自制力を身につけていた。要するにこの伯爵夫人は、同時にモンテスパン夫人でありカトリクス・ド・メーシスであり、何ならニカチェリーナ二世でもあったといえる。すなわち、世にも稀な美貌のかげに、大胆きわまる政治的天才と、最も幅広い女性的天才を兼ね備えていたのである。弟を嫉視する長男の憎悪、父親の憎悪と冷遇に抗して、甥に目をかけ通したこと、前述のさまざまな危険から甥を救ったこと、かつてウージェーヌ副王の宮廷の花形でありながら、のち没落したこと、こうした危機はみな彼女生来の力を豊かにし、才能を鍛え、眠っていた本能を呼びさました。そうした本能は、当初の華やかな境涯や、ナポレオンに忠誠を誓う夫が終始留守がちであったため結婚の喜びを味わうことが稀だったというような事情から、彼女の魂の奥底に眠りこんでいたのである。ここで人が彼女のうちに見、あるいは察知するもの、それは情熱のつ百千の財宝、最も美しい女心のうちに宿る富、そして輝きである。

彼女の魅力のとりこになった老司教会員は、ピエモンテ地方の都会ノヴァーラに居るファブリスを某司祭の庇護のもとに置いた。

司祭は次のような文句で警察の追求にとどめをさす——「あ、長男に生まれないかったのが不服な次男坊ですよ。ジーナも、かつてはファブリスがやがてナポレオンの副官にとり立てられるだろうなどと思っていたが、ナポレオンがセント・ヘレナに流されるのを見るにおよんで、ミラノの警察のブラックリストに載った以上、ファブリスは彼女にとつてもはや永久に失われたにひとしいと悟るにいたった。

ワテルローの会戦に際し、不安がヨーロッパ全土を覆っていたころ、ジーナは名高いパルム大公、ラヌッチオ・エルネスト四世の宰相、モスカ・デッラ・ローヴェレ伯爵と識り合いになった。

ここでいったん立ち止まろう。

たしかに、この本を読み終えた場合、モスカ伯爵のうちに、かのメッテルニッヒ公の最も卓抜な肖像を見ないわけにはゆかない。もちろん、舞台はオーストリア帝国首相官邸から一小国パルムへと移されてはいる。が、このパルム公國にしても、またその驚くべき君主エルネスト四世にしても、やはりモデナ公とその公國（ナポレオンに於ては「モデナ公國」の一八一四年再興。當時は「模倣術教」に於ては「ランチェーネ」四世が専制を布いていた。」を写したもののようにな、私には思われるのだ。ペール氏はエルネスト四世のことをヨーロッパでも最も富裕な君主の一人と言っているし、モデナ公の富強といえは誰知らぬ者もない。人身攻撃に陥ることを避けるため、作者はウォルター・スコットが『ケニルワース』（訳註二）の構想を立てるのに費したにもまさる多分の才能を傾注している。事実、前記二点の類似は、外面的には十分これを否定し得るほど漠たるものだが、内面的にはきわめて真実に迫ったもので、具眼の士にとつては見誤るべくもない。ペール氏はパルム公國の宰相の崇高な性格をいやが

上にも高めているので、はたしてメッテルニッヒ公といえどもモスカと同等の大人物かどうか疑わしくなるほどだ。もともと、この有名な政治家が、その生涯をつぶさに知る者にとって、少なくともモスカのそれに劣らぬほど大きな情熱の燃焼の例を一、二示していることも事実である。オーストリアの宰相がモスカの隠れた偉大さをすべて持ち合わせていると考えると、別段中傷にはなるまい。作品全体を通じて明らかになるモスカという人物像、ジーナがイタリア最大の外交家と見るこの人物の行動について見るなら、この偉大な性格がそれを通じて發揮されてゆく大小さまざまな事件、無数の、そして続々と継起する陰謀を案出するためには、作者の側の天才こそ必要不可欠だったといえよう。メッテルニッヒ氏が長い政治的經歷を通じて行なってきた全業績も、読者がモスカにおいて見る行動以上に驚くべきものではない。すべてが作者の独創であり、また一宮廷において万事がもつれ、かつほぐれてゆくさまと寸分の違いもなく、作者がすべてをもつれさせ、すべてを解きほぐして見せたことに思い至るなら、いかに気おくれを知らず、また構想をめぐらすことに慣れた精神も、これはどの放れわざを前にしては、しばし茫然自失せざるを得ないだろう。私としては、文学上のアラディン^{アラジン}のランブ^{ランボ}といったようなものが存在することを信ずるほかない。ショワズール氏^{ルイ十五世に仕えた敏腕外}、ボチヨムキン^{ロシアの將軍、政治家。エカチエリナ二世の寵臣}、メッテルニッヒ氏^{外交家。一七九一—一七八五}の力量をもつ天才を登場させることをあえて試み、しかもその人物を無から創造し、かくして生まれた人物の行動そのものによって創造の行為を証明すること、その人物にふさわしく、その力量を發揮させるに足るだけの環境のうちで彼を活躍させること、これははや人間わざではなく、妖精

ないし魔法使の所為である。考えてもみていただきたい。ウォルター・スコットの最も技巧をこらした複雑な筋立てすら、かくも数多くの事件、デイドロの有名な表現を借りるなら、かくも枝葉の多い事件を物語るこの小説を貫く、あのみことな単純さには達していないのである。

モスカの肖像は以下の通りのものである。時は一八一六年、このことを銘記していただきたい！

「彼は四十か四十五になっていたろう。顔の造作は大きかったが、勿体ぶった様子は毛ほどもなく、単純で快活なところが好感を抱かせた。主君の奇妙な趣味で、よき政治的信条のあかしとして髪に粉をふることを強要されていなかったら、まだ立派な男前で通ったかもしれない」

メッテルニッヒ氏も髪粉をつけているし、それはもともと柔和な氏の顔立ちをさらに柔和に見せたものだが、その髪粉はモスカの場合、こんな風に主君の意向ということで、言いわけがついている。

ペール氏は、読者の眼を欺き、自らのひそかな仄めかしから読者の注意をそらそうとして、実に巧みな創作を各ページに取り入れているが、そのひとつかたならぬ努力にもかかわらず、われわれの心はもっぱらモデナへ赴き、一向バルムに止まろうとはしない。誰であらうと、およそメッテルニッヒ氏を見、識り、会ったことのある者は、モスカの口を通して彼の言葉を聞く思いがしようにし、またモスカに彼の声音を与え、彼の物腰を想定するだろう。作品中でエルネスト四世は死に、他方モデナ公は現に存命中であるが、人が常に想起するのは、ミラノの自由主義者たちが残虐という名で呼んだほどの、峻厳きわまる治政によって名高いこの君主なのである。事実、これ